



作品紹介 藤島武二《聖女》

藤島武二(1867~1943)は、1905(明治38)年から1910(明治43)年にかけてのフランス、イタリアでの留学から帰国して後、日本の風景や人物を主題とした油彩画の制作について模索を重ねる。縦長の画面に女性像を描く試みも繰り返され、キリスト教美術の聖人画の様式に取りながら、東洋の女性美を描くことの可能性を研究していたことがうかがわれる。装飾と写実、聖と俗、西洋と東洋、そうした対立する要素が拮抗したところに生まれたのが本作だと言えよう。東西両洋の美に通じた藤島の芸術の特徴を、優れて示す作品の一つである。

(学芸員 三谷 涉)



## 絵画と出会う「この一点!」

## 木村蒹葭堂とその交友

会場：田辺市立美術館

会期：2024年2月10日(土)～3月24日(日)

ここに掲載した作品は、天明6(1786)年、木村蒹葭堂51才の時のものです。左上の蒹葭堂の款記には、中国宋代の画家、米友仁(1074~1153)の筆づかいにならったと記されています。その記述の通り、本作品は米友仁が創出した技法とされている、筆を横に倒し、点を重ねて樹木や岩山を描く米点法が用いられています。米点法は温暖で潤滑な景観を表現する技法として、日本の文人画家も好んで用いました。

また、この蒹葭堂の款記から、本作品は讃岐の画家である亀井東渓(1747~1816)のために描かれたことが判明しています。この東渓は『蒹葭堂日記』にも登場し、交流のあったことがうかがえる人物です。そして本作品が描かれて11年後の寛政9(1797)年に、蒹葭堂と深い交友のあった京坂の儒学者、細合半斎(1727~1803)が東渓の依頼によって、右上の漢詩を揮いました。この漢詩には「わずかな時間で雲煙が宿る」、「墨汁の深い山川」、「虹影が渓水を飲む」、「にわか雨後の樹林」といった内容が詠まれており、まさに先述の米点法によって表現されている、潤いのある豊かな山水の世界と呼応しています。そして漢詩の最後には、画中に住む人の中に旧友がいると記されており、半斎は本作品の中に、友である蒹葭堂の姿を見出していたことも推測されます。

加えて、本作品の中央上部には、同じく京坂の儒学者で、蒹葭堂と親交のあった奥田元継(1729~1807)による、蒹葭堂を米友仁に次ぐ米法山水の大家であると讃える内容の贊が記されています。この贊も寛政9(1797)年の款記があることから、東渓が半斎同様に奥田にも贊の揮毫を依頼したものと思われます。

以上のように、本作品は蒹葭堂の幅広い交友関係を知ることができます、大変興味深いものです。なお本作品に付帯して残っている、野呂介石(1747~1828)の弟子、田中介眉(生没年未詳)の書簡には、本作品は誠に面白く自分自身にしたいものだと思う旨が記されています。紀州の文人画家である介石もまた、蒹葭堂と頻繁に交流のあった人物の一人で、介眉は本作品を通じて、師の友人である蒹葭堂に思いをはせていたかもしません。

(学芸員 糸川 風太)

木村蒹葭堂《米法山水図》(関西大学デジタルアーカイブ)  
([https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/osaka\\_gadan/203933559#?page=1](https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/osaka_gadan/203933559#?page=1)より転載)

## 田辺市立美術館へのきもち㉙

2年前の初秋、家族と湯の峰温泉に宿泊した帰り道に、熊野古道なかへち美術館を訪れた。展覧会が目当てというよりは、美術館そのものに興味があつて訪問した。というのも、2018年に熊野古道なかへち美術館の開館20周年記念特別展として開催された、「鈴木昭男ー内在ー」と、そのオープニング、クロージングパフォーマンスのことを知り、山に囲まれた美術館で何とも面白そうなことをやっているなど、その時から興味を持っていたからである。鈴木昭男氏の別のイベントで、ご本人から直接、「今度和歌山でやるんですよ、中辺路というところで。」などと聞いたのが、熊野古道なかへち美術館を知った最初だったと記憶している。

はじめて訪れたときには、ちょうど「現代の総V」が開催されていて、中野恵美子さんの作品に魅了された。建築はもちろんのこと、外の自然との展示室がゆるやかに繋がっている感覚が何とも心地良かったことを覚えている。建物の中に入ると小さな展示室が一つあり、それを囲むようにガラス張りの回廊のようなスペースが配置されている。山々に囲まれた小さな美術館の持つ独特の雰囲気が、私の思考や創作的な感覚を刺激し、さらに興味が湧いた私は、「担当の学芸員さんはいらっしゃいますか?」と窓口の方に尋ねたところ、今日は不在とのこと。しかし三谷涉さんというお名前とともに、普段は本館の田辺市立美術館に勤務されていることなどを教えてくださいました。そんなきっかけで、私と三谷さんの交流が始まった。

自分の活動について三谷さんと話していると、海外派遣でドイツのケルンに滞在していた時、あちこちの美術館で、展示室やエントランスを使ったコンサートが行われていたことを思い出した。閉ざされたスペースであるコンサートホールで聴く音楽とは違い、美術作品と同じ空間で行う演奏や、自由に人が行き交うエントランスなどで演奏は、従来の音楽の聴き方、聴かせ方から脱却する、あらゆる実験の場として機能しているようでもあった。特に私が専門とする現代音楽は、美術館との相性がとても良い。そんなイメージで、いつか美術館で演奏してみたい、というような夢を持つようになっていた。

コロナ禍を過ごしていたある日、三谷さんから「本館の方で演奏をお願いできますか。」とご依頼いただき、本当に嬉しく、心躍ったことを覚えている。そして今年の8月、念願の美術館での演奏がようやく叶った。今回は、小企画展「戦後美術 変容するかたち」の関連企画でのミュージアム・コンサートということで、確かに春頃にはもう展示される予定の作品についてレクチャーを受け、その後、展覧会が始まった7月に会場の下見に訪れた。5つの展示室には、アクション・ペインティングのような新しい創作・表現方法や、伝統的な技法を用いつつも従来のものとは異なる表現を目指したものなど、様々なタイプの作品が展示されており、コンサートの選曲も展覧会からヒントを得ながら行った。また、練習の際にも、これらの作品から受けたインスピレーションをもとにあれこれとアイデアを試したりして、いつもとはひと味違った準備の時間になった。当日の演奏は、田辺市立美術館のエントランス・ホールで行ったが、熊野古道なかへち美術館と同様に、こちらも自然に囲まれた環境にあり、演奏中、天窓が段々と暗くなり日が暮れていくを感じつつ、空間や環境と対話をするような感覚で演奏できたことは、私にとって新しい発見であった。

そして今、演奏だけではない、新しい表現方法を模索しているところであるが、家族や親しい人たち、そして和歌山に暮らすようになってからいつも身近に在る自然をテーマにした「音」の作品にチャレンジしたいと考えている。そんな作品をまた美術館で発表できることを目標に、これからも精進していきたい。

(ユーフォニアム奏者・  
和歌山大学准教授 小寺 香奈)



今夏のミュージアム・コンサートにて

## 田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.39

編集・発行：田辺市立美術館

発行年月：令和5年10月1日

## 田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43  
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771  
<http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/>田辺市立美術館分館  
熊野古道なかへち美術館〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891  
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393  
<http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/>

## 編集後記

ORANGE初の試みの折込み付録「屏風mini」は、折って、立てて飾っていただけるアイテムです。玄関や机の片隅に置いてみてください。雰囲気が変わりますよ。

4年振りに開催した8月のミュージアムコンサートは大盛況でした。秋は各地で行事が多く催されますが、当館の展覧会やイベントもお見逃しなくお願いします。

(F.O.)

